

高柳健次郎先生とビクターから学んだこと

VICTOR'S DNA FOREVER

第2回ビクター高柳会
講演 麻倉怜士氏

2014年1月20日
於、アルカディア市ヶ谷

【はじめに】

私、昔からビクターが大好きです。家にビクター犬が全員揃ってるんですよ。昔からビクター製品を個人的にも使っていますが、評論家になってからも「ソニーさんとビクターさんは、本当に私を育ててくれた」と本当に思っています。今日は恩返しというつもりで、評論家の仕事を始めた1980年から30年の中で感じたことを述べてみたいと思います。ここでタイトルを述べます。

VICTOR'S DNA FOREVER

です。これから映像がさらに高度化していく中でこれまでビクターがやってきたことは、まさにいま通用すること、逆にいまそれがないから日本のエレクトロニクスが難しくなったのではという感じがしています。

この前もCESを見てきたんですが、韓国は曲がるディスプレイとか4Kとか、トレンドはつくっているけど、その中身があるかという、ちょっと違うのではないかと思います。ビクターがやってきたことは、私にとってもすごく勉強になりましたが、業界にとってももう一度きちんとしたことを学ばなければならないと思い、日経トレンドに去年1月に「ビクターに学べ」という記事の前編を書きました。この1月16日に後編がこういうタイトルで出ました。



連載：麻倉怜士の“家電大国”日本に喝！

麻倉怜士が“喝” 名門企業・ビクターが残したものに学べ！

2013年01月11日

今回は、オーディオ・ビジュアルの世界において日本ビクター（現・JVCケンウッド）が残してきた足跡を考えてみましょう。同社は2007年8月までパナソニックの連結子会社でしたが、外資系ファンドとケンウッドの株主争いの中で最終的にケンウッドが勝ち、経営統合した結果、JVCケンウッドとなりました。

その有為転変で象徴的なのが横浜・新子安地区です。ここには伝統の本社があり、その地にあ



麻倉怜士（あさくら れいじ）デジタルメディア評論家、日本面質学会副会長、津田塾大学講師（音楽）

I 私とビクター製品の歴史

まず「私とビクター製品の歴史」を語ります。最初の出会いはアンサンブルステレオでした。

1961年 小学六年生 アンサンブルステレオ



VICTOR STL-661

Master of picture quality REDTASAKURA all rights reserved

私が小学校6年の時でした。父はハイテク好きで最先端のもの、最新製品をよく買ってくるんです。振り返ってみると、私がいまここにあり、音楽やオーディオの評論をしているのはこのステレオ STL-661 のお陰と言っても過言ではありません。このステレオを聴いて、子供心にすごいなと思いました。特に付属のデモンストレーションレコード「ステレオへの招待」には鳥肌が立ちました。それは「村祭り」という唱歌でした。初めがモノラルで、途中から音場が横に拡大され、見事なステレオになるのです。感動ですよ。音楽って、ステレオってこんなにワクワクするのか。いまの音楽評論家、オーディオ評論家の原点は絶対ここにあったと思っています。



その後、個人的にたくさんのビクター製品を使わせてもらっています。

1970年、大学2年の時にビクター純白カラーTV
残念ながら当時の写真がありません。

1978年、スピーカーSX-5はプレジデント編集部時代に感動を受けた商品です。



1979年のプリメインアンプ A-X5は結婚2年目に買った忘れられない商品です。おかげで素敵な新婚生活が送れました。



1984年 HR-D725 は私が評論家のたまごの時代です。VHS がソニーのベータと戦っていた時代でもあり、この Hi-Fi には大変感動しました。



1985年のテレビモニターAV-M280、この画質は特にすばらしくて、あとでお話しますが、当時ソニーの対抗機プロフィールとはちがって、絵に艶があって、「ビクターの絵とは何だろうか」研究してみようということになるきっかけでした。

1986年 HR-D470、これカセットをたてに入れるんですが、画質が良いんですよ。大好きでした。



1989年の SX-1000、これは私が評論家として家を新築し、シアターを作った時に選んだスピーカーです。



1994年 HR-20000、これはもう画質が実に良くてオンエアより一度録画した方がよく見える S-VHS 機でした。

こういうことをリマインドしてみると、私をつくったのはビクターだなとつくづく思います。

II 私にはビクターのここに感動した

II-1. emotional fidelity 人の感覚に沿う画質と音質

ビクターが私を感動させたそのポイントは二つあると思います。第一が人をまず最優先にして、人に一番感動してもらうためにはどういうことをした方がいいのかを考える画質・音質です。それを私は少し格好良く「emotional fidelity」という言い方をしています。

単なる Hi-Fi(Hi-Fidelity)でないのです。それは「ヒューマンな高解像力」とも言うべきで、単に細かいところがよく再現されているだけでなく、いかに見る人を感動させるかのクオリティの仕掛けが込められているか、なのです。

ではテレビの emotional fidelity から考察していきましょう。ビクター「第3ネットワーク」AV-M280 の独特の味わいは、ソニーにも、パイオニアにもないもので実に感動的でした。私は HIVI に書きました。



記事ではその素晴らしさを次のように表現しています。

「他のメーカーでは絶対に出せない、まさにビクター独自のテクスチャーとトーンである。それはファイングレインー 微粒子である。手で握っても、指の間からサラサラこぼれ落ちるような細かい砂・・・そんな形容もできそうなキメの細かさである。解像度・鮮鋭感が高いのは、もちろんのことだが、その映像には優しい味がある。それは滑らかさ、暖かさ、まろやかさ、そして艶っぽさである。本機ほど、絵をきれいに見せてくれるモニターは、他にない。人の視覚に物理的に訴え、心の琴線を奏で、感動的な映像体験に至らしめるビクターの絵づくりである。」

つまり、ひじょうにヒューマンな映像であると言えます。私は、今でも、何でこれほど黒が沈み、しかも艶があるのか不思議に思っています。

第2回ビクター高柳会、麻倉怜士氏講演

次にインターレースにこだわった「ダブルトレース」。

インターレースにこだわった「ダブルトレース」

単なるプログレッシブは不自然な、ぼってり画調

MUSEハイビジョンテレビ。31.5kHzの倍速走査。2本を強制的に重ねて1本にし見掛けを15.75kHzのインターレース走査にする面倒な方式

HIVI記事
「努力の成果は、明らかだ。微小信号の波形が崩れることなく、きわめて細かいところまで、明確に、正確なリアリティを保って再現される倍速画面は、史上初。動きの部分もボケが大変少なく、ここまで画像情報が細かく再現される倍速表示は、これまで見たことがない。鋭いシャープネス、見晴しの良さ、そしてディテールまでの透徹した描写力を見るならば、これが倍速走査で描かれた画像であるとは、誰もが信じられない思いだろう」

Master of picture quality REDII ASAKURA all rights reserved

MUSE ハイビジョンテレビの時、単なる SD のアップル・コンピュータのプログレッシブでは不自然なぼってり画調になるので、ビクターは2本の走査を強制的に重ねて1本にし、見かけを15.75KH zのインターレース走査にするというとても面倒なことをしていました。私の感想を述べた HIVI 記事です。

「努力の成果は明らかだ。微小信号の波形が崩れることなく、きわめて細かいところまで、明確に、正確なリアリティを保って再現される倍速画面は、史上初。動きの部分もボケが大変少なく、ここまで画像情報が細かく再現される倍速表示は、これまで見たことがない。鋭いシャープネス、見晴らしの良さ、そしてディテールまでの透徹した描写力を見るならば、これが倍速走査で描かれた画像であるとは、誰もが信じられない思いだろう。」

重要な事は、ビクターはこれらの開発を通じて画質を見る目が育まれてきたことでしょう。どういう絵が良い画質で、その反対に避けるべき画質とは何かということ測定器に頼るのではなく、実際の目で見て訓練していったのです。そうした絵に対する見方が、知らず知らずのうちに技術者の皆に伝わり、独特の「ビクタートーン」が形成されていったのではないのでしょうか。

2 番目の emotional fidelity は VHS です。

ビクターが VHS をテイクオフさせたのは 1976 年のことです。もうすでに 30 年以上も経過しています。そのビクターの VHS のアクティビティを振り返ってみると、私は明確に 2 つの流れがあったと思います。それは「大衆化」と「ハイエンドなものづくり」の 2 つです。

スタートしてからの 10 年は、ソニーのベータとの戦いを通じて、VHS をいかに大衆の間に普及させるかに突っ込んだ期間でした。私がビクターのビデオのものづくりに感動したのは、まず最初の HR-3300 でした。私が一番感心したのはメカニズムの官能性でした。操作レバーのあのカチカチという手触り感はソニーのガチャとは大違いでした。



この官能的な操作性は操作ボタンがメカからロジックに変わった後についても維持されていました。

私が VTR の評論を始めたのは 80 年頃の話ですが、それから 7～8 年の間は、常にビクターの画質はソニーと並びトップでした。当時のビクターの画調はまろやかにして、色が豊かで、しかも S/N も優れていました。その後、80 年代の後半には競争関係の中で、さすがのビクターも色を失ったようなところがあり、90 年代の初頭までは低迷時期が続きました。この時期、商品企画にもキレがなくなり、自信を失ったかのように見えた時もありました。その危機を救ったのが、ハイエンドな製品の開発でした。

第 2 回ビクター高柳会、麻倉怜士氏講演

つまり大衆向けと並ぶ、もう一方のビクター VTR のコンセプトである、徹底的に高品質を目指した商品づくりが、ここに確立するのです。例えば、92 年の HR-20000。これはその後も、ハイエンドな画質づくりの当時の頂点を成すもので、S-VHS の限界を超えたその圧倒的な画質、音質はマニアに絶賛され、ハイクラスのユーザー層に「ビクターの画質」の印象を深く刻んだのでした。



ここにビクターは 2 つのコンセプトを獲得しましたね。ひとつが、VHS スタート以来の「大衆化」という目標、もうひとつが質にこだわるユーザーに向けた、「ハイエンドなものづくり」です。

オーディオも emotional fidelity なのです。オーディオにおけるビクターらしさとは何か。私は「ヒューマンな音」といつも言っています。かつて大ヒットした「SX-3」というスピーカーがありますが、SX シリーズがビクターの音の原点であり屋台骨となり、発展してきた歴史があります。日本ではパイオニアやソニー、ヤマハなどがスピーカーを作っていますが、ビクターはそのなかでも特に個性が明確で、艶やかなビクターサウンドとしてのアイデンティティーがありました。それはユニットからエンクロージャー、音作りまでの伝統があるからです。



そういうわけで、目で見える画質もそうですよ、耳から聴こえた音質もそうですよ、感触もそう、メカニズムも・・・何でもトータルな感覚性がというか人間の感覚に沿う官能性をビクターの製品から感じたというのが第一のポイントです。

II-2. ディレクターズ・インテンションの尊重

ビクターが私を感動させた二つ目のポイントです。

映画でも音楽でも、作者の意図＝作った人の熱い思いがある。それをきちっと伝えてあげることはきわめて重要です。テレビの文化はそれを勝手に変えてしまいう、何でも見やすいようにするところがあります。でも、そうではないでしょう。つくった人の思いがあるのだから、それをきちっと伝えてあげる事こそ大事なことです。ハイビジョンになって、高画質になったから、そんな intention が伝わるようになった。それをちゃんと伝えるのか、伝えなくていいのかが分かれ道で、ビクターは「伝えます」というところに力点を置いた。それが私が感動したもう一つのポイントです。

まず、絵作りには2つの段階があるという話をしましょう。第1に基礎体力を上げること。動画性能が劣っているのなら倍速化、コントラストが弱いのなら補強

するための信号処理を行う。ここまではどのメーカーでもやることです。

次にもっとも大事なのが、基礎体力を上げた上で、どういう絵を作っていく、です。

ビクターで特徴的だったのは、日本で唯一といってもいい、「表現型の絵作り」に取り組んでいたことです。映像に造詣の深い絵づくり担当のエンジニアが、映画作品のコンセプトを理解した上で、場面場面にふさわしい画調設計を行ったのです。

絵づくりにおいて、映像だけからでは、映像が伝えようとしている本当の意味はよく分からないことが多いのです。その時は、映画の脚本を読む、さらには映画の原作を読むと、シーンにおける映像の意味合いが分かってきます。

「作者がどのような気持ちで映像を創造したのか、どう見てほしいのかを再現するように努めます。一瞬一瞬がストーリー性を感じさせるような肌色再現、階調感、陰の付け方、髪の毛の描写、背景の浮き上がり感……を、考えていくことがとても大事なんじゃないでしょうか」という話をビクターの豊嶋さんから聞いて、とても感動しました。次の二つの映画のそれぞれを見て、いかなる絵作りを心掛けたか、そのコメントを紹介しましょう。



豊嶋さんは「それが“赤い勝負服”なら、着ている女性がどういう勝負をするかを理解しなければなりません。ストーリー全体における、そのシーンの意味が分かれば、服の赤と背景のバランスをどう取るべきかも

自然に見えてきます」と言いました。



豊嶋さんは「女優チャン・ツイーの演技にどれほどのリアリティが感じられるかは、絵づくりの問題です。物語の流れの中で、そこが白のピークを強く打ち出したシーンなのか、それとも暗闇の奥行きを感じさせたいシーンなのかをよく考え、ストーリー全体を意識したチューニングをしています」と言いました。

さて、今でも唯一ビクターの DNA を引き継ぎ、その画質は他社の追従をゆるさないのはホームシアター 4K プロジェクターです。ビデオサロンの 2014 年 2 月号に書いた記事を再録しましょう。

「フル HD コンテンツのアップコンバートではビクター機の表現力の豊穡さが、ひじょうに印象的だ。コントラストが高い、階調再現が緻密だというハード的な側面もさることながら、特に映画において、その作品が持つ情報性、情緒性をきわめて正確に再現するのである。

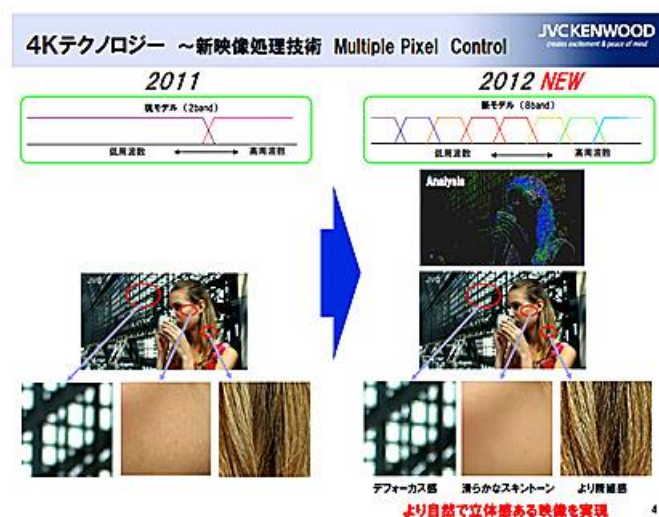
当然、アップコンバートに超解像を加えるわけだが、超解像側のエンハンスがかなり強調気味だと、すべての映像部分が、「強すぎる」傾向になる。実は第 1 世代の 2011 年の DLA-X70 では、初めての 4K モデルということもあり、かなり強調的な映像になっていた。もとの映像がぼけ気味なところも、くっきりとさせ、輪郭も必要以上に強められていた。それではディレクターズ・インテンションの精神に悖る。

その反省にたって、第 2 弾の 2011 年の DLA-X75

では原画に合わせた最適なアジャストメントを可能にするよう、周波数帯域を低域、中域、高域で独立して調整できる MPC(マルチプル・ピクセル・コントロール)機能が搭載された。強調的になるのは、だいたいの場合、超解像処理によって中域がブーストされる結果だ。それなら、中域レベルを下げれば、映像はすっきりとして、余計な太りがなくなるのではという発想から開発された。

その効用は抜群。高域ボリュームを上げ、中域を下げると、ほとんどのフル HD コンテンツが、2K で観るより、はるかに上質で豊潤な 4K 的精細画像になった。しかも、ユーザーが低域、中域、高域をどのように調整したらよいかを判断できるよう、周波数分布の分析画面も表示される。今回の第三世代の DLA-X700 では、周波数調整が自動になった。入力信号を分析し、そのコンテンツにふさわしい周波数特性を与える作業をすべてプロジェクターが行ってくれる。

ビクターの根本姿勢は、「コンテンツ尊重」である。アップコンバート+超解像の過程で、コンテンツが望まないような画像強調を行わずに、いかにナチュラルに 4K にアップコンバートするかにかかわるのだ。作品性を活かす調整機能は、ビクター機をたいそう魅力あるものにしている」



Ⅲ 原点は高柳健次郎

今日のアジェンダの三番目の話をしましょう。
 今日は高柳先生の会ですから、先生のお話です。皆さんは関係者で、私は外様ですから先生についての情報はみなさんの方が圧倒的に詳しい。でも個人的な印象ならお話してもいいかもしれませんね。先生がお亡くなりになる一年位前の1988年2月に逗子のご自宅でお会いいたしました。その時に、イロハのイの字の話から始まり、さまざまなテレビの話をしていただきました。
 特に印象に残っているのは、89歳と大変なお歳なのに「これから頑張って研究するんだ！」って。何を研究



するんですかと伺うと、「色ですよ!!」と、すごく若者のように澁刺としゃべってらしたのが、とても思い出に残っています。
 そこでどういう内容の話をして下さったのかを少しお話ししましょう。
 これが HIVI 88 年 3 月号です。「感動の色をもとめて。テレビの父 高柳健次郎に聞く。聞き手 麻倉怜士」。ちょっと前文を読んでみましょう。
 「テレビの発明者 高柳健次郎氏にインタビューする機会が持てた。現在のテレビジョンはこの人がいなかったら、まったく別の姿になったかもしれないといわれる人である。テレビを発明したのは日本人であるということに、われわれは誇りを持つ」。

第2回ビクター高柳会、麻倉怜士氏講演

インタビューの中から、私が感動したところを抜き出してみます。まず私の地の文です。

「ビクターの色はなぜ艶っぽいのか。その大きな理由はビクターマトリックスに拠っている。NTSC 方式で定められた色のマトリックスにあえて沿わずに、独自の軸を設定しているのである。その結果「色が濡れたように感じるのでしょう」(高柳)。ビクターマトリックスはいわば感動を得るための色設計規範。高柳氏の言う「感動の色」の実現に向けた一つの工夫である。」

(高柳)「もっとリアルな色が欲しい。もっと感動的な色をテレビで見たい……と、思い始めたんです。テレビでどんなに忠実に撮って映し出した絵でも、偉大な画家が描いたその絵には遠く及ばない。本物の絵は我々に強烈な印象を与え、感動させてくれる。でも、写真やテレビの画面はそれがどんなに綺麗であっても、感動がない。それは何故なんだろう」。

(麻倉)「我々でも一生の間に何度か景色を見て、非常に感動することがあります」。

(高柳)「そうですね。ところがその感動というのは、見る人と時によって違うんですね。そのシチュエーションをどうやって見付けだすかということです」。

先生はこれから色の研究をされるということですが、どういう研究をされるのですか？とお聞きしましたら、画家の話をしてくれました。

(高柳)「プロの画家は、景色を見た時にすぐ絵を描くわけではなく、心に情報をインプットして、後で色彩を思い起こしながら描いていく。心の印象を再現する——つまり、心理的な感動を抜き出して、美を感じさせるようにしてくれるんです。物理的な色をそのまま描くのではなく、ある色の情報を際立って鋭敏に感じ、キャンバスに機微にあう色を出すようにしているんじゃないかと思うんですね」。

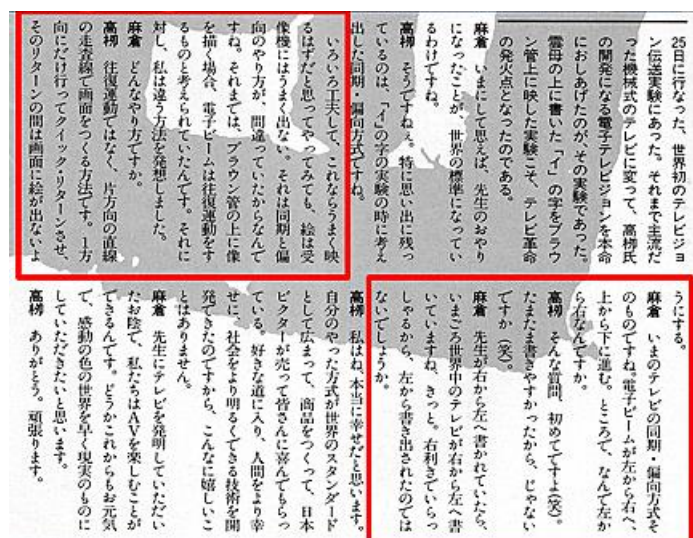
麻倉「テレビの世界でも、感動の色が出なければならぬと……」。

高柳「そうです、そうです」。

単に写真を撮ってそれを加工すればという話ではなくて、人間が感じたものを人間として出していく。私が今日のテーマとして選んだのは、とてもヒューマンであるとか人間的であるとかを、ビクターの映像や音から感じているという話ですが、先生のベーシックな人間に対する考え方とか人間の感覚に対する考え方が、ビクターの定番的なテーマになっているという思いを強く持っています

最後に先生のお話から個人的に一番感動したエピソードをしましょう。

常日頃、テレビのことで是非聞いてみたいことがありました。何でテレビは左の上から走査が始まるのでしょうか？ということがわからないんですよ。右の上からでもいいんですよ。どこからでもいいんですよ。縦でもいいんですよ。80年代の後半、すごく不思議に思っていたことでした。先生がテレビをつくったんだから、先生に聞くしかない。いい機会だと思い聞きました。



「先生、何でテレビは左上から走査線が始まるのでしょうか？」先生は、こう言いました。「私が浜松高等工業でテレビを教えていた時、黒板が目の前にありました。私は右手で白墨をとって左上において、それを右の方へ落としてきました。テレビというものはどちらから始まってもいいんだけど、私が右利きだったから左から始まったんです」と。「なるほど、じゃあ先

生が左利きだったら、テレビは右から始まったんでしょうか？」「それは、そうですね」

そこから私は学んだことがありまして、発明とはすごくシンプルなところから始まっている。シンプルだからこそ、その発明は偉大なものになって大産業をつくった、と。先生に直に聞くチャンスがあつて、個人的にとっても感動しました。

【おわりに】

皆さんはビクターであるパートを担当されてきたんですが、私は全部を見る機会がありました。ビクターは人間を大事にする、ユーザー目線の会社だと感じました。ビクターには技術と真摯に向き合つて、「よりオリジナリティを追求する」という文化が確実にありました。人に寄り添う、人を考える、人を優先する画質・音質がビクターのレーゾンデートル（存立理由）でした。画質・音質は何のために必要なのか。それは単に情報を伝えるためだけではなく、伝えることによって更に別の境地へ誘い込むために高画質・高音質なんです。それは単なる数字の問題ではなくて、まさに人間の問題なんだということを、私はビクターの製品から学びました。

より制作者の意図に沿った映像を見ることによって、物語の世界により深く入っていける——このような重要な公式が、ビクターの絵作りによって導かれました。今、非常にテレビが安くなり、ハイビジョンは全国民に普及しました。オーディオもデジタル化し、配信も含めて幅広く普及しました。しかし考えてみると、みんな平準化して同じようなものが同じように使われています。そこには「ほかと同じ」ということしかありません。

「これ一品」という製品の強さや映像の強さ、音の強さに対してどうつきあっていくかという文化がとても希薄になっている感じがします。しかし、そこで

も、ビクターのように「テクノロジー」と「ヒューマンセンス」というキーワードでものを作っていくことがこれからもとても重要になるのではないのでしょうか。

これからこそビクター的な絵作り、音作り、もの作りが必要になってくるのではないかと、私は大変強く思っております。ご静聴、ありがとうございました。

まとめ

ビクターには技術と真摯に向き合って、「よりオリジナリティーを追求」という文化が確実にあった。

それは人に添う画質、音質であった。

それを4K、8Kの時代になり、もう一回評価すべき。

人が見ていい映像、耳で聴いていい音を求めるのは、どんな時代でも変わらない。

Master of picture quality REIJI ASAKURA all rights reserved

VICTOR'S DNA FOREVER

FIN